

ヘイトを生み出す価値観の差について先月号で語ったが、私たち日本人がことに理解に苦しむのが「family value」について価値観である。ニュース番組でよく耳にするこの用語は、直訳すると「家族の価値観」で善良なイメージだが、単純な邦訳がはばかれるほど危険な政治的・社会的コンセプトを含んでいる。

この用語をもっとも活用しているのは米国のキリスト教保守派と彼らを支持基盤とする共和党保守派の政治家であろう。現代社会に蔓延する問題を解決するためにキリスト教に基づいた伝統的な道徳観、すなわち「family value」を見直すべきだという彼らの主張は、もっともなことに聞こえる。だが、これには公立学校での聖書の教育と祈禱を許可し（最終的には義務化が目標）、生物学で「進化論」ではなく神が世界を創造したという「創造論」を教え、墮胎を違法化し同性愛を社会から追放することなどが含まれているのである。反対に、リベラルに立つ「family value」は育児施設の普及や産休の徹底、シングルペアレントや同性カップルを伝統的な夫婦と同等の立場にすることであり、同じ言葉でも価値観は徹底的に異なる。

当初は私も「和」を重んじる典型的な日本人として、「それでもふたつのグループが円満に共存する方法はあるだろう」と信じていた。だが、ときには、町がひとつの価値観を選択し、その価値観を守るために相反する価値観と一致団結して闘うことも必要なのである。それを私に実感させてくれたのが、私の娘の母校エスタブルック小学校を舞台にした事件であった。

新聞やテレビ番組で取り上げられ全国的に有名になった「エスタブルック事件」について「事実」を伝える

ウェブサイトに数多いが、ほとんどが前述のキリスト教保守派によるもので、事実とはほど遠い。従って、本誌では小学校の保護者を中心になつて結成した「Lexington CARES」というグループが公表する情報を中心に、当事者から私が直接入手した情報と個人の体験を加えた「エスタブルック事件」についてお話ししようと思う。

二〇〇五年四月二十九日の早朝、私はボストングローブ紙の地域版を見て、一瞬目を疑った。レキシントン町のエスタブルック小学校で、幼稚園児の父親が不法侵入罪で逮捕され、一晩拘留されたというのだ。新聞から私が読み取ったのは次のようなことだった。

バトルグリーン／連載エッセイ6

渡辺 由佳里

価値観の衝突

プロフィール

わたなべ ゆかり・1960年兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。2001年、『ノーティアーズ』で第七回小説新潮流篇新人賞を受賞。2003年、二作目『神たちの誤算』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。



に通っている息子が学校から持ち帰った「デイパーシティブッグ」(家族には誰が含まれている?)という本の「同性愛」に関する内容に不安を覚えた。学校に何度か懸念を伝え、校長と町の教育長と2時間にわたる話し合いを持ったが、納得する回答を得られなかった。

私には記事を読み終わった後も唖然として紙面を見つめていた。これだけ読むと、まるでレキシントン町やエスタブルック小学校が親に内緒で「行き過ぎた性教育」を行っているみたいではないか!

*

たデイヴィッド・パーカー氏は、この本で取り上げられている「同性結婚」などという「成人向け」のテーマを教えるタイミングは親の自分が決めるべきであり、学校での会合の目的は「息子がさらにゲイ家庭についての本や授業に暴露される懸念」だったと述べ、「私はただ、良い父親であるうとしただけ」とコメントしている。また、同性結婚に反対の立場を取るモルモン教徒のロムニー知事は、この特定の件に関するコメントは避けたいものの、「法では、人の性に関連する事柄を教室で教

えるときには親に通知しなければならず、親はその授業のあいだ子供を教室から離れさせることを選べる」として、「親の知る権利を支持する」と婉曲的にパーカー夫妻をサポートするニュアンスを含ませた。

実は、私は娘が卒業した1年前までこの記事に登場する「デイパーシティブッグ」を作った「Anti-Bias Committee(反偏見委員会)」の一員だったのである。私たちがこのデイパーシティブッグを作ったのは、アメリカで「普通」の家族とみなされている「白人・キリスト教・父親と母親がそろっている」家族だけが「普通」ではなく、すべての家族が「普通」である、というレキシントン公立学校の信念を小学校のコミュニティ全体に普及させ、どんな家族を持つ子供であっても差別されたり虐められたりすることがない環境を作り上げるためだった。バッグには、ユダヤ教徒とキリスト教徒の家族が理解し合うようになる心温まる話や多文化の料理レシピなど子ども

の発育年齢に合わせたレベルの本が数冊入っていて、希望する子どもだけがバッグを家に持ち帰り、両親と一緒に読んで感想を話し合う。持ち帰りにしたのは、子どもだけでなく親にもこの信念を理解してもらおうためだった。パーカー夫妻が問題にした「Who's in the family?」という本は、他民族の家庭や母子・父子家庭、外国からの養子、そして「ふたりのお母さん」といったエスタブルックに実際存在する多様な家族のことを、「こんな家族もいるのですよ」と紹介する絵本にすぎない。彼らが「成人向けのテーマ」だと指摘したページにしても、二人の女性が子供たちと一緒に庭で飼った犬を洗っているのと、二人の男性が少女と夕飯の支度をしているイラストで、どこにも「同性愛」を語る文章はみられない。しかも、学校が始まる前に、このバッグを持ち帰る義務がないことは書面でパーカー夫妻を含む全ての親に通知していたのである。

*

実は、「性教育」にはまったく無関係なこの本が逮捕劇にエスカレートしたのは、偶然ではなかったのである。(次号につづく)

*新聞などで既に公表されている固有名称は実名(カタカナ表記)を、その他の人物はプライバシーを保護するために仮名を使っています。